



URL <http://e-jousenji.com/>

浄泉寺寺報

発行日 平成28年1月10日
 発行者 浄泉寺住職 赤羽根 證信
 住 所 大崎市岩出山字浦小路113
 電 話 0229-72-1168

光顔巍巍として威神極まりなし

浄泉寺 住職 赤羽根 證 信

御姿まぶしく 徳かぎりなく その光明に 並ぶ者なき如来よ
 日月も 宝珠の光も 御身に隠れ 墨玉のごとし
 如来の御姿 世に並ぶ者なく さとりは音として 十方に響き
 戒・聞・精進 三昧・智慧の徳 並ぶ者なく すぐれたもう
 諸仏のさとの 海のごときを 深く念じて 奥底をきわめ
 愚かさや欲と怒り とわに御身になく 王の中の王にして 御徳はかりなし
 功德は広大 智慧は深妙 その光明は 世を揺るがしたもう —以下略—

参考：岩波文庫『浄土三部経（上）』の梵文和訳より

あけましておめでとうございます。

浄泉寺寺報(俱会一處)を発行してから20年になります。平成7年、本堂建設記念誌を製作中、ソフト面での活動として寺報・護寺会報をご門徒の皆さんに届けようと企画され、以来今回まで継続されて参りました。これひとえに担当された責役赤間榮夫氏と広報委員大坂弘氏の力によるものと心より感謝申し上げます。

浄土三部経・仏説無量寿経の中、歎佛偈に「光顔巍巍として威神極まりなし」にはじまる偈文があります。

釈尊の弟子阿難が「いつも師のそばに居るのですが今日はまるで別人の様に光り輝いています」と申し上げる。釈尊は「これまで説いて来た教えでなく、今日は在家の人々のために教えを説きましょ

う」と「佛(阿弥陀佛)の本願(ねがい)を信じて念佛申す」ことを進める。

偈文の最後に「我行精進忍終不悔」と結ぶ。即ち「われ行を精進にして忍びて終に悔いなし」と…。

最近の世相は自分中心が横行して、思い通りにならないと、他に害を及ぼすことが報じられ、詐欺や残忍な殺しが多くなっている様にさえ思います。

ほとけの願に生きることは信じ合い支え合い助け合う心を育てて行くことにあると先人は説いています。

経済優先は、いのちより金が大切。しかし命失ったら金は不要です。命を粗末にし、おびやかす時代に進もうとする現代、佛経精神を今こそ自分に引き寄せてみようではありませんか。

同朋の会活動を振り返って

同朋の会 会長 庄 司 寿 夫

あけましておめでとうございます。

平成24年9月に同朋の会が発足しました。今年で3年目を迎えています。

ご住職のご指導のもと、同朋の会は、毎月20日に開催し、毎回、約20名の会員が参加しています。月別の話題は次のとおりです。

1月：修正会、2月：涅槃会、3月：春彼岸、4月：春のつどい、5月：同朋の会総会、春のつどい開催、心に刻む集いに参加（仙台国際センター）

6月：白い彼岸花球根の植付け、7月：称名念仏、8月：盂蘭盆会、9月：帰敬式受式者研修会（帰敬式既・未得者対象）実施、秋彼岸、10月：東北別院報恩講参詣、11月：浄泉寺報恩講、12月：1年の反省。

この中で、7月の「称名念仏」について話題になったことを記します。

「お念仏は、必ず声に出して称えなさい。その声が仏となり私に呼びかけてくださるのです」とのご住職のお話です。改めて、称名念仏の大切さを認識しました。

毎朝、朝参りでも澄み切った本堂で、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏…」と十遍称えます。そうすると気持ちが「スーッ」します。

もう一つは、タカハシ電化さんの紹介でご住職が大分県の瀧さんに白い彼岸花の球根を送っていただきました。その球根を6月に皆さんと一緒に駐車場の土手に植えて、9月に白い花が咲きました。

これは、「白い彼岸花」をとおして人と人を結びつける様になりました。

これからも同朋の会が「細く、長く続く」様に会員皆さんと育てたいです。

味わい深い音楽法要

浄泉寺副住職 赤羽根 聡

あけましておめでとうございます。

去年は春のつどい、盂蘭盆会、報恩講などの当山における各種行事だけでなく、組内の各寺坊で催される行事にも参加させていただきながら、自分の身を問い、そして常に願われている身だということを実感させていただきました。これもひとえに、御門徒の皆さまのお力添えのことと感謝申し上げます。

今、私は仏事と仕事の傍ら、2月に加美町で行われる「第九」演奏会に向けて、十数年ぶりにひらく楽譜と格闘しております。シラーが作詞し、ベートーヴェンが曲をつけた『歓喜の歌』はこの交響曲のハイライトで、全ての人々に対する平和と共存を願うた意味だったと解釈しています。

この「第九」と同様に衆生の生きる歓びや願いをまとめた歌があります。親鸞聖人の誕生日とされる毎年4月1日に厳修される「音楽法要」です。親鸞聖人が詠んだ和讃に曲をつけた仏教聖歌です。

学生当時、合唱団に所属していたものの、私にとっては「迷物行事」で、半ばお付き合い程度での参加という思いでしかありませんでした。最近ようやく「音楽法要」の味わいを感じるようになってまいりました。その中の『念仏による合唱』と『恩徳讃』はこの曲のハイライトで、満堂と一体化する非日常的な雰囲気と感動につつまれます。とても懐かしい思い出であり、機会があれば再びその魅力に直に触れ、味わってみたいと思う楽曲です。

このように今年もいろいろな事象に触れ、南無阿弥陀仏と感じられる毎日を過ごしてまいりたいと思います。本年もどうぞよろしくお願いいたします。 合掌

平成27年 報恩講実施報告



報恩講は、浄土真宗の寺院では重要な行事で、宗祖親鸞聖人のご命日である11月28日を縁として「聖人の教えに遇う」「聖人の徳を讃え、恩に報いる」法座として全国各地の真宗寺院で行われます。

本山では毎年11月21日から28日までの8日間、東北別院では毎年10月15日から17日までの3日間行われます。

浄泉寺報恩講は、毎年11月23日(祝日)に実施しており、今年も大勢の方々のご参詣をいただき盛大に行われました。

会式前には副住職奥さまのピアノ伴奏で「真宗宗歌」を斉唱し午前9時30分、副住職の調声による「みんなでのお勤め」に始まり、庄司護寺会会長の総代挨拶に続き、午前10時「ご満座勤行」が執り行われました。

ご満座勤行には組内のご住職が多数参集され、厳粛な勤行となりました。

午前11時にはご法話「宗教をどう考えるか……」を、東北別院輪番清谷真澄師よりいただきました。師のご法話は、日常の話題を取り上げ、わかりやすく解説され、門徒の皆さんの胸に沁みわたるものでした。

最後に参詣者全員で「恩徳讃」を斉唱し、その後、担当地区の皆さんが用意されたお斎をいただき散会いたしました。

ご参詣いただいた門徒の皆さんは古川

や鬼首から団体で参詣されたこともあって、盛大な報恩講を開催できましたこと、心から感謝申し上げます。

また、報恩講前に行う「おみがき」には護寺会・同朋の会の皆さんのご協力もあって、荘厳が光り輝き報恩講の雰囲気を一層盛り上げることとなりました。

各会役員、地区担当の方々、ご門徒の皆さまに支えられ、真宗宗派寺院の一大事業である報恩講を無事終了できましたこと、重ねて感謝申し上げます。

ご住職お孫さま得度式



真宗の僧侶になるための儀式が8月7日、東本願寺にて執り行われました。

真宗大谷派では、親鸞聖人が9歳で得度されたことから得度式は9歳以上とされており、これに浄泉寺の赤羽根證信住職のお孫さま2名が参加されました。

大寝殿には、受式する僧侶の卵が全国から108名集合し、白い浄衣(じょうい)に着替え式場の御影堂に移動、いずれも緊張の面持ちで式に臨み、大谷暢顕(ちょうけん)門首による「剃刀の儀」を受け「法名」と「墨袈裟」を授かりました。その後、真宗本廟に戻り一人ひとりに度牒(どちょう:僧侶としての身分証)と法名伝達がなされ、僧侶としての第1歩を歩み出しました。

赤羽根美乃 法名 釋尼美稱

赤羽根 樹 法名 釋樹真

平成27年 帰敬式受式者研修会実施



9月8日、浄泉寺本堂にて帰敬式受式者研修会が行われました。

浄泉寺では5月に行われる「春のつどい」の中で帰敬式が行われ、2回目の今年まで20名が受式されました。それ以前に真宗本廟にて受式された方11名を加えると現時点で31名の受式者がおります。

当日はその対象者の中から22名が参加され研修を実施しました。

◎研修会スケジュール

9:00 開会

1. 真宗宗歌斉唱
2. 勤行（正信偈同朋奉讃）
3. あいさつ：住職
4. 講師紹介と日程説明
（講師：仙台教区 鷲嶺彰宏師）

10:00 講義 テーマ：帰依三宝

11:30 昼食

13:00 講義 テーマ：帰依三宝

14:00 質疑応答

恩徳讃斉唱

休憩

15:00 懇親・懇談

16:00 閉会

この研修は毎年行い、真宗門徒としての素養を高めて行く所存ですので、先ず帰敬式をお受けになります様お薦めいたします。申込は浄泉寺まで。

年回表（平成二十八年）									
百回忌	五十回忌	三十回忌	二十回忌	十三回忌	七回忌	三回忌	一周忌	一年忌	
大正六年	昭和四十二年	昭和五十五年	昭和五十九年	平成二年	平成六年	平成十二年	平成十六年	平成二十二年	平成二十七年

あ と が き

平成8年創刊された浄泉寺寺報が第21号を迎えました。

寺報と護寺会報の発行は、本堂建設の3年後。「真宗の教えと浄泉寺の行事等の紹介を軸に、それぞれ毎年一度ずつ発行して行こう」という、責役赤間榮夫氏の提案を受け、ご住職の裁断により始められました。

この2つの機関誌、20年間一度も休刊することなく発行し続けられたのは、原稿を書き続けられたご住職と赤間氏をはじめ寄稿いただいた門徒の皆さまによるところが大きいと思います。

今年21号の発行の節目にあたり感無量の心境とともに、今後どう進めて行くのかを考えると責任の重さも痛感します。今号から体裁を変え横書きとし、文字を少し大きめにして少しなりとも見やすさを出したのですが如何でしょうか？

「継続は力なり」とよくいわれるものの「力なり」の部分に多少の不安も残りますが、浄泉寺広報の一環として誕生したこの機関誌を継続することが肝要ではないかと思います。

今後も皆様のご協力をいただきながら更に前進したいと考えますので、話題提供の感じで、気軽に寄稿をお願いいたします。
（編集委員）